



PATEK PHILIPPE
GENEVE

《報道資料》 ページ 1

パテック フィリップ ジュネーブ
2023年6月

パテック フィリップ、《ウォッチアート・グランド・エキシビション（東京2023）》を開催

パテック フィリップは、6回目となるこの世界的グランド・エキシビションの開催地として、フラッグシップ市場のひとつである日本を選択した。2023年6月10日から25日まで、一般公衆と愛好家は、2,500 m²を超える広さの展示会場を訪れ、ジュネーブの通りやレマン湖岸の雰囲気、およびパテック フィリップの舞台裏を発見し、ジュネーブ最後の独立した家族経営の時計マニュファクチュールの世界に浸ることができる。このイベントは、当社がこれまでに開催した最大のエキシビションであり、6点のリミテッド・エディション、および希少なハンドクラフト作品のコレクションも発表される。

パテック フィリップは、偉大なジュネーブの伝統の後継者として常に、とりわけ展示会を通じて、卓越した時計製作への情熱を伝えることを重要視してきた。クォーツ危機が猛威をふるった1970年代から1980年代にかけて、当社は《創造的な手》、《芸術作品としての時計》などの巡回展を開催し、機械式時計の復興に主導的な役割を果たした。今から11年前、パテック フィリップは、その創作、遺産、哲学、および広範な専門知識への理解を深めるための、新しいコンセプトによる一般公開、入場無料のグランド・エキシビションを開始することにより、さらなる一步を踏み出した。これまでに開催された5回のイベントを通じ、その規模と範囲は拡大し、合計約16万5,000人の来場者を迎えた。ドバイ（2012年）、ミュンヘン（2013年）、ロンドン（2015年）、ニューヨーク（2017年）、シンガポール（2019年）に続き今回、パテック フィリップは第6回ウォッチアート・グランド・エキシビションの開催地として東京を選んだ。希少なハンドクラフト、時計製作におけるすべての技術的卓越性と精緻な仕上がりを高く評価する、鑑識眼の高い愛好家の国、日本は当社ブランドにとって歴史的にきわめて重要な市場である。伝統への敬意とアヴァンギャルドな精神が融合した文化に育まれた日本の顧客は、1839年の創業以来パテック フィリップを導いてきた《革新の伝統》の哲学を理解する完璧な資格に恵まれている。

他に類を見ないセッティング

《ウォッチアート・グランド・エキシビション（東京2023）》の会場としては、過去のエキシビション同様、開催都市を象徴する場所が選ばれた。2023年6月10日（土）から6月25日（日）まで、西新宿の超高層ビル街の中心、1日約350万人の乗客を数え、日本で最も利用客の多い駅である新宿駅から至近距離の住友三角広場で開催される。2020年にオープンした三角広場は、三角形の新宿住友超高層ビルの1階レベルに構築された約3,200 m²の広大なホールである。高さ最大25 mの巨大なガラス張り天井に覆われ、内部に柱はない。パテック フィリップは、この自然光に満ちたスペースに、著名な花時計を含むジュネーブの通りやレマン湖岸を彷彿させる、2,500 m²を超える展示会場を創出した。これはウォッチアート・グランド・エキシビションの中で最大の規模のものとなる。複数のテーマ・エリアに分けられた展示は、見学者をパテック フィリップの世界への旅に誘い、ロース通りの歴史的本社、プラン・レ・ワット工場、パテック フィリップ・ミュージアムという、当社のジュネーブにおけるランドマークを目の当たりにさせる。それはあたかも1万キロメートル彼方のジュネーブから、これらが東京にやって来たかのようなものである。



現行コレクションのすべてと希少なハンドクラフト・コレクション

パテック フィリップ《ウォッチアート・グランド・エキシビション（東京2023）》には、500点以上のタイムピースと、幅広い専門知識を示すオブジェが展示される。とりわけ見学者は、象徴的なデザインから最も洗練された機構まで、時計製作のすべての分野をカバーする、マニュファクチュール パテック フィリップの広範な紳士用・婦人用現行コレクションのすべてを鑑賞することができる。

パテック フィリップが細心の配慮を注いで保護育成してきた希少なハンドクラフト技術（七宝細密画、クロワゾネ七宝、手彫金、細密な木象嵌、手仕上げのギョシェ装飾、ジュム・セッティング）も展示される。40点のユニークピースとリミテッド・エディション（ドーム・テーブルクロック、懐中時計、腕時計）には、日本の文化、その豊かな芸術性、および先祖代々伝えられた技術・ノウハウがインスピレーションを与えている。また見学者の目の前で職人たちによる作業の実演が行われる。

パテック フィリップ・ミュージアムの珠玉の作品

エキシビションには、ジュネーブのパテック フィリップ・ミュージアム所蔵作品から厳選された約190点のタイムピースが、特別の許可を得てはるばる東京まで運ばれ、展示される。《オールド・コレクション》（16世紀から19世紀初頭）は、世界最古の時計のいくつかと、時計製作史を画する数多くの技術的および美的傑作を網羅する。マニュファクチュールの豊かな遺産を収めた《パテック フィリップ・コレクション》のタイムピースには、1925年にパテック フィリップが発表した知られる限り最初の永久カレンダー腕時計（No. P-72）、1948年製作のワールドタイム1415 HUモデル（No. P-1026）、およびジェームズ・ウォード・パッカードが所有した1918年製作のミニット・リピーターと30日間のパワーリザーブを備えた懐中時計（No. P-1703）などがある。《歴史的オーナー》と名づけられた新しいエリアには、1851年のロンドン万国博覧会でヴィクトリア女王に贈呈されたペンダント・ウォッチ（No. P-24）をはじめ、著名なオーナーが所有していたタイムピースが展示される。

時計製作のマスターピースが一堂に集合

ひとつのルームには、パテック フィリップ完全自社開発・製造による多数のムーブメントが展示され、構成部品の製造工程を紹介する新しいエリアと、研究開発分野の専用エリアも設けられる。マニュファクチュール パテック フィリップの卓越した分野のひとつであるコンプリケーテッド・ウォッチには多くの展示スペースが用意され、今回、グランド・エキシビションとしては初めて、超複雑タイムピース（キャリバー 89とスターキャリバー 2000を含む）の特設セクションが設けられる。チャイム・ウォッチも《マスター・オブ・サウンド》と名づけられた専用のスペースに展示される。これらには、最も複雑なパテック フィリップ・グランドマスター・チャイム（20の複雑機能）とスカイムーン・ツールビヨン6002R-001モデルが含まれる。見学者はまた、さまざまなムーブメントの作業を実演する、パテック フィリップの有資格時計師たちと知り合う機会も与えられる。一般公衆や愛好家は、このイベントのために日本人オーナーから貸与された特別なタイムピースを目にすることができる。



注目を集めるリミテッド・エディション

《ウォッチアート・グランド・エキシビション（東京2023）》では、これまで同様、パテック フィリップのすべてのセグメントを網羅するリミテッド・エディションの発表が合わせて行われる。6点のリミテッド・エディションには、新しい自動巻のカドラブル・コンプリケーション（5308P-010モデル）、現地時刻と同期した日付表示を備える最初のワールドタイム（5330G-010モデル）という、世界初公開の2つの技術的壮举が含まれている。この他ミニット・リピーター・ワールドタイムのエクスクルーシブなバージョン（5531R-014モデル）、婦人用ムーヴメント・モデルの洗練されたバリエーション（7121/200G-010モデル）、および2点のピュアなデザインのカラトラバ・モデル（6127G-010モデルと7127G-010モデル）がある。

パテック フィリップについて

創業以来180年以上にわたり、パテック フィリップは高級時計製作芸術におけるジュネーブの誇り高き伝統を継承しつつ、中断することなく発展させてきた。最後の独立した家族経営のマニュファクチュールであるパテック フィリップは、創業者アントワース・ノルベール・ド・パテック（1839年）とジャン・アドリアン・フィリップ（1845年）のヴィジョンに忠実に、専門家が一致して世界最高と認めるタイムピースを開発、設計、製作する完全な創作の自由を享受している。輝かしい歴史に裏づけられたパテック フィリップの革新の伝統は、その保有する100件以上におよぶ技術特許にも如実に現われている。

パテック フィリップは常に完璧さを追求し、比類のない品質と信頼性を備えた時計を創作してきた。そのユニークでエクスクルーシブな特質が、これらのタイムピースを希少で価値あるものとし、世代から世代へと継承して行くにふさわしいものとしている。独立。伝統。革新。品質と精緻な仕上がり。希少性。付加価値。美。サービス。思い入れ。継承。これらがジュネーブのマニュファクチュール パテック フィリップが誇る10の価値を体現している。

2009年、パテック フィリップは機械式タイムピースに関する独自の品質規準であるパテック フィリップ・シールを創設した。これは既存の認証をはるかに超え、技術・ノウハウ全体のみならず製造、精度、および例外的なタイムピースのメンテナンスに不可欠なすべての条件を網羅している。パテック フィリップ・シールは完成したタイムピース全体に適用される。またムーブメントのみではなく、タイムピース全体をその評価の対象とし、創業以来のすべてのタイムピースについてその寿命の全期間にわたるサービスをも対象とする唯一の品質規準である。

マニュファクチュール パテック フィリップは、1932年以来スターン家によって所有されており、現社長はティエリー・スターン氏。ティエリー・スターンは2009年に社長に就任し、完璧な品質と信頼性を目指し、時計製作技術と素材研究におけるパテック フィリップの主導的地位を保持することに積極的に取り組んでいる。



パテック フィリップと日本

マニユファクチュール パテック フィリップ 最初期の数十年（幕末と明治維新时期）以来、多くの日本のお客様が当社の時計に魅了されてきた。すでに当時の販売台帳には、多くの日本人顧客の名前を見出すことができる。

1873年、特命全権大使の岩倉具視率いる著名な岩倉使節団がパテック フィリップのジュネーブ本社を訪問し、マニユファクチュール創業者アントワース・ノルベール・ド・パテックが自身で案内役を務めた。この様子は公式報告書『米王回覧実記』に3ページにわたって詳しく報じられた。以後、パテック フィリップ・タイムピースの入手を希望する日本の要人は、ヨーロッパで直接購入するか、日本で活動するヨーロッパ商社の仲介を通じて購入することになった。パテック フィリップ・タイムピースの日本への正規輸入は1950年代後半に始まり、2003年には日本法人PPジャパン株式会社が設立された。

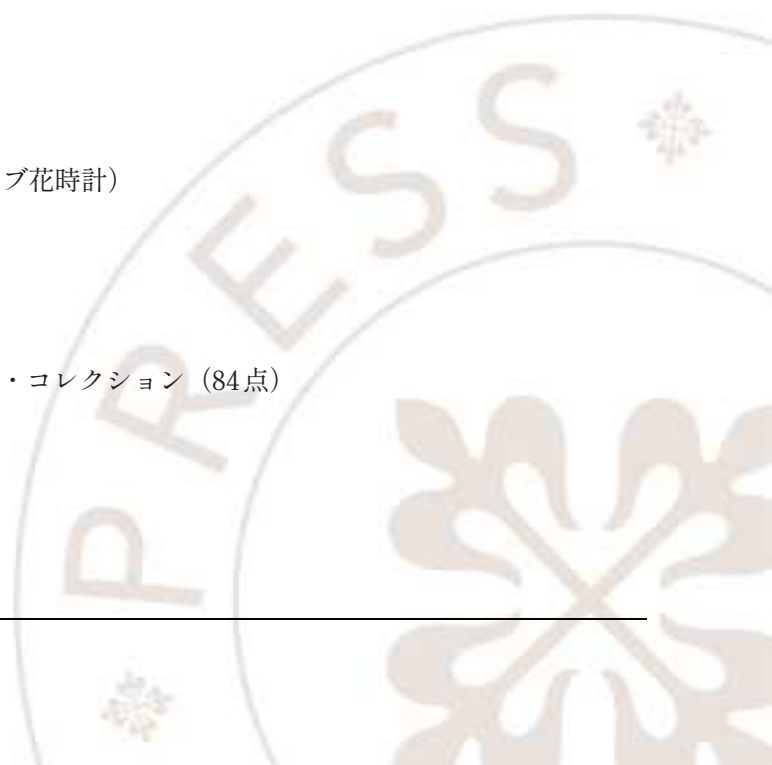
4世代（1932年以来）にわたるパテック フィリップ社主であるスターン家も、優れた職人技に対する日本人の深い造詣がパテック フィリップの精神と完璧にマッチすることから、日本が豊かな文化的土壌を体現していることを長年にわたり認識していた。現社長ティエリー・スターンの祖父であるアンリ・スターンは、1950年代末から1970年代にかけて何回か日本市場を訪問し、後を継いだフィリップ・スターンも1960年代から2000年代にかけて訪日した。今日、ティエリー・スターンは頻繁に日本を訪れ、多くのブランド愛好家と会い、パテック フィリップ・タイムピースの卓越性について対話を続けている。

主要データ

- ・ 第6回パテック フィリップ・ウォッチアート・グラン্ড・エキシビション（2012年のドバイ、2013年のミュンヘン、2015年のロンドン、2017年のニューヨーク、2019年のシンガポールに続く）。
- ・ 2023年6月10日（土）から25日（日）まで東京・住友三角広場にて開催。
- ・ ウォッチアート・グラン্ড・エキシビション中で最大規模のものとなる、2,500 m²を超える展示会場。
- ・ 400点以上の時計と100点以上のオブジェを展示。
- ・ 日本市場に向けた6点のリミテッド・エディション。

テーマ・エリアとルーム：

- ・ ジュネーブの《イギリス公園》（レマン湖風景とジュネーブ花時計）
- ・ シアター・キオスク
- ・ 歴史的建物、現行コレクション・ルーム（148点）
- ・ 歴史的建物、ナポレオン・ルーム（4点）
- ・ パテック フィリップ・ミュージアム・ルーム（166点）
 オールド・コレクション（82点）、パテック フィリップ・コレクション（84点）
- ・ 歴史的オーナー・ルーム（14点）
- ・ 日本人コレクター貸与タイムピース・ルーム（10点）





《報道資料》 ページ 5

- 希少なハンドクラフト・ルーム (40点)
- クラフトマン・ルーム：木象嵌、ギョシェ装飾、クロワゾネ七宝、七宝細密画
- マニュファクチュール・ルーム：
製造工程エリア
ムーブメント・エリア：回転表示キャビネット (ムーブメント36個)、インタラクティブ・ショーケース (ムーブメント64個)
- 研究開発・アドバンストリサーチ・エリア (8点)
- スーパーコンプリケーション・ルーム (3点)、グランドマスター・チャイム没入体験
- マスター・オブ・サウンド・ルーム (17点)
- ウォッチメーカー・ルーム
- ブックストア、ミニマッピング：《A.N.ド・パテックとJ.A.フィリップの出会い》

